「若手ゼミ」創設の想い

吉田　千秋

秋が深まった頃、小屋敷琢巳さんから「二五周年の企画として、創立当時の思い出を書いていただきたい」という依頼がありました。すでに、一五周年の時点で、石井伸男さんが「若手ゼミ創設のころ」と題した一文を寄せておられるので、あまりつけたすことはありません。しかし、その時点からもすでに一〇年たつし、若手ゼミ発案者として自分なりに書き留めておくこともよいかな、と思って引き受けることにしました。

さて、第一回若手ゼミは一九七三年七月に神奈川県の湯河原温泉で開催されました。いま手元にある『哲学の探求』創刊号を見ると、地方別参加者数も掲載されており、北海道一四名、関東・東北・北陸十八名、東海一五名、関西一三名、九州・沖縄三名、と記されています。これだけでもいろいろなことがよみがえり、当日の感慨を思い起こします。なにせ、この回を準備しだした頃には、「三〇名ほどはきてほしいね」と石井さんともくろんでいたのに、六三名とはほんとうにうれしかったものです。

当時、私はオーバードクターの非常勤講師暮らしで、子ども一人、非課税世帯の共働きでした。真下真一、藤野渉の両先生のもとで唯物論の立場からの勉強をすべく、京大から名大の大学院へ入って七年目。先輩たちも苦労した人が多く、ポストにありつけないことはさほど気にしなかった。むしろ、同じような立場にあって苦労しながら研究している人たちとの交流がほしかった。「愛知県非常勤講師懇談会」なるものをつくって、二、三の私立大学で待遇改善の署名をしたり、交渉したりもしました。

しかし、なんといっても哲学の世界で同じような苦労をしている人間と、学問上での議論の場がもっとほしいという気持ちが強かったのです。参考にしたのは、物理学分野での若手研究者のゼミナールで

した。自分のひとりよがりではいけないので、七一年の日本哲学会にかんする動向（『科学と思想』第二号）を共同執筆のかたちで一緒に仕事をした石井さんに、哲学分野の若手ゼミナールを組織する発想を打ち明けることにしました。石井さんも同意され、目黒区の石井さん宅で、かなりいろいろ話し合い、やってみようということになった。とはいえどこにどのような仲間がいるのかもわからない。それを手助けしてくれたのは、当時『科学と思想』の編集委員をされていた大枝さんでした。彼から主だった人たちの名前を聞き、親友の吉田傑俊さんにも相談して、村山紀昭さん、向井俊彦さんにも加わってもらい、京都での会合をへて、五名の呼びかけ人で各地に案内ビラを発送することになりました。

成算が十分にあるわけではなかったが、呼びかけの熱意が伝わればうまく行くという感じを皆が抱いていました。「ここ数年私たちのような若い哲学研究者は数多くなっていますが、いまこそ要求されている現代の哲学研究の前進をめざして一堂に会し、各自の問題意識・研究成果をぶつけあい、討論を深める機会をもつべきだと考えます。……」とよびかけた案内文は、自分から言うのはおかしなことですが、若さあふれたものでした。それは、「私たち若手研究者は劣悪な研究条件のもとにあるにも関わらず、既成の研究者とはまた違った新鮮な問題意識と創造的な研究意欲をもち、自由な研究活動を展開しています。……」とつづく記述にも伺われますし、「わずか三日間の試みで、掲げた目標にどれだけ接近できるかわかりませんが、こうした機会が個々人にとっても、日本の将来の発展にとっても必ずや何らかの益をもたらすだろうことを確信します。」と結んだ部分は、それこそ確信に満ちた呼びかけになっていました。

組織の運営面についても大いに議論しました。若手らしい新鮮な課題の設定とともに、最大限の民主的な運営をはかることや、ボス支配にならないように世話人は2年でやめるとか、古手（？）の権威はいっさい借りないとか、一回一回次年度の開催を確認するとか、数多くのことを確認しました。これらの運営原則が、二五年も続いた大きな要因ではな

かったか、とひそかに思っている次第です。

第一回ゼミナールは、内容面でも実に新鮮で大胆な課題のもとに準備が進められ、大いに成果がありました。シンポジウムは「現代における人間と哲学」「芝田進午氏の科学労働論について」「哲学史研究の方法と課題」「現代観念論の諸形態」の四テーマで行いましたが、どれも溌剌たる報告のもとに活発な意見が飛び交い、元気の出る場になりました。ほかに、専門別交流会、個人発表、それにコンパを行い、どれも素晴らしいものでした。残念ながら、私は原稿（たしか、その秋にでた『科学と思想』掲載の「歴史の進歩と倫理的価値」）でノックダウン、最初の世話人だけやって、あとは石井さんまかせだったので、すばらしさの臨場感はいまいちでしたが……。

ともかく、こうして若手ゼミナールが誕生しました。当初は、古手（？）から「世代間差別を煽っているのではないか」となじられたりしたこともありましたが、幸い多くの人たちから歓迎され、今日にいたっています。二五年ものあいだ、一回一回を苦労されながら企画され、運営されてきた歴代の世話人の方々に、あらためて感謝します。

（よしだ　ちあき　岐阜大学）